

気分が状態的本来感に与える影響

The Effect of Mood on State of Authenticity

1W173063-0 嵯峨崎 天音

SAGASAKI Amane

指導教員 渡邊 克巳 教授

Prof. WATANABE Katsumi

概要：本研究では、気分が状態的本来感に与える影響について検討した。予備調査によってポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの3つの気分を誘発させる動画の選定を行った。実験1では、選定された動画を呈示用いて、各気分を誘発させ気分と本来感の関係について検討した。分析の結果一部を除いて条件間における本来感の尺度は有意とはならなかった。実験2では、尺度の回答順番と本来性尺度の変更を行い同様の実験を行ったが、条件間における本来感の尺度は有意でなかった。どちらの実験でも、相関分析の結果、気分と本来感間はかなり弱いながらも有意な相関が見られた。これらの結果は、条件によっては気分の差が本来感に影響を与えるとしても、一貫して強い影響を与える頑健な影響ではないことを示唆する。

キーワード：本来感, 気分, 自己

Keywords: state of authenticity, mood, self

1. 序論

我々は「自分らしい」という感覚を物や自身に対して抱くことがある。このように、「自分らしい」という感覚を持つことが、心身にポジティブな影響を及ぼしていると言われている。近年、本来感は時間や状況により変動する側面があることが指摘されており、Lenton et al. (2013)はポジティブな気分の時は本来感が高まり、ネガティブな気分の時は本来感が低くなると仮説を立て、実験を行って肯定的な結果を部分的に得ている。しかし、気分の誘発が確認されていないため、ポジティブな気分が本来感を高めるのかについて必ずしも十分な実験的証拠が出揃っていない。さらに日本においては、特性的本来感の検討の実験が盛んではない。そこで本研究では、気分の変化が本来感へ与える影響を検討した Lenton et al (2013)の実験の追試を行った。

2. 実験1

2.1. 実験方法

Yahoo!クラウドソーシングを用いて584名(男性353名, 女性231名, 平均年齢35.2歳)が実験に参加した。用意した3本の動画(ポジティブ条件, ネガティブ条件, ニュートラル条件)の内1つを視聴した後、気分の尺度である日本語版PANAS(佐藤・安田, 2001)に対して回答した。その後RSOS(Erickson, 1995)と日本語版本来性尺度(石川ら, 2014)の2つの本来感に関する尺度に対

して回答した。日本語版本来性尺度は自己疎外感, 他者影響感, 本来的自己感の3つが含まれている。また質問紙の最後の質問において「全く視聴していない」もしくは「途中まで視聴した」を選択した参加者は、今回調査対象から除外された。

2.2. 結果

動画による気分の誘発自体が成功しているかを確認する為、PANAS値に対して参加者間1要因分散分析を行った。その結果、条件間の差は有意であった($F(2, 543) = 244.51, p < .001, \eta^2 = .474$)。多重比較の結果ポジティブ条件($M = 9.66, SD = 8.01$)の方がニュートラル条件($M = 5.35, SD = 6.66$)より有意に高く($p < .001$)、ニュートラル条件よりネガティブ条件($M = -6.58, SD = 7.53$)の方が有意に低かった($p < .001$)。即ちポジティブ条件, ニュートラル条件, ネガティブ条件の順にPANAS値が高いことが確認された。

次に本来感について条件間に差があるか確認した。RSOSのスコアに対して1要因の分散分析を行ったところ、条件間で差は見られなかった($F(2, 543) = 0.99, p = .369, \eta^2 = .004$)。次に本来性尺度と条件間の差を検討するため、条件3(ポジティブ, ネガティブ, ニュートラル: 参加者間要因)×本来性下位尺度3(本来的自己, 自己疎外感, 他者影響感: 参加者内要因)の2要因混合分散分析を行った。交互作用効果は有意でなく($F(4, 1086) = 1.90, p = .249, \eta^2 = .019$)、条件の主効果も認められなかった($F(2, 543) = 1.46, p = .232, \eta^2$

= .005)。事後的に本来性尺度の下位尺度ごとに条件間での評定値の違いを比較した結果、他者影響感においてのみ条件の主効果が有意であった ($F(2, 543) = 4.35, p = .013, \eta^2 = .016$)。更に多重比較の結果、ネガティブ条件 ($M = 4.11, SD = 1.00$) とポジティブ条件 ($M = 3.79, SD = 1.08$) の間のみ有意な差が見られ ($p = .010$)、ネガティブ条件の測定値の方が高かった。即ち、本来感の尺度の内、他者影響感のみがポジティブ条件がネガティブ条件より低いことが確認された。

PANAS 値と本来感の関係を確認するため、全条件の PANAS 値と各本来感の変数についての相関分析を行ったが、相関の向きは仮説を支持する方向に出るも全てかなり弱い相関であった。

全ての本来感尺度において条件間で差が見られなかった原因として、時間の経過によって誘発された気分がもとに戻ってしまった点と本来性尺度の質問項目が、現在の状態を問う内容に変更されていない点が想定されたため、これらの点を改善を行った上で実験 2 を行った。

2. 実験 2

2.1. 実験方法

Yahoo!クラウドソーシングを用いて計 288 名 (男性 182 名, 女性 106 名, 平均年齢 33.78 歳) が実験に参加した。本実験においては本来性尺度の 12 個の質問項目を、現在の自身の状態を問う内容に変更し、尺度の回答する順番を RSOS、本来性尺度、PANAS の順にした上で実験 1 と同様に実験を行った。

2.2. 結果

PANAS 値の参加者間 1 要因分散分析を行った結果、条件間の差が有意であった ($F(2, 253) = 3.07, p < .05, \eta^2 = .023$)。多重比較を行った結果、ポジティブ条件がネガティブ条件より PANAS 値が高いことが確認された ($t = 2.44, p < .05$)。

RSOS のスコアに対して 1 要因の分散分析を行った結果、条件間の差は有意ではなかった ($F(2, 253) = 0.40, p = .668, \eta^2 = .003$)。更に実験 1 と同様に条件×本来性尺度の 2 要因混合分散分析を行った結果、条件の主効果は認められなかったが ($F(2, 253) = 1.46, p = .755, \eta^2 = .002$)、交互作用が有意に見られた ($F(4, 506) = 0.28, p = .043, \eta^2 = .019$) ため単純主効果を検討した。しかし、本来

的自己 ($F(2, 253) = 0.01, p = .989, \eta^2 = .001$)、自己疎外感 ($F(2, 253) = 2.82, p = .062, \eta^2 = .022$)、他者影響感 ($F(2, 253) = 1.52, p = .220, \eta^2 = .012$) のいずれにおいても条件の効果は認められなかった。PANAS 値と各本来感の変数についての相関分析を行った結果、実験 1 と同様に全てかなり弱い相関のみ確認された。

3. 総合考察

今回の研究で行った実験 1 では、ポジティブ条件の他者影響感のスコアがネガティブ条件より有意に高いということが観察されたものの、実験 2 はすべての尺度に関して有意な差は見られなかった。実験 1 と実験 2 で共に条件間の差の出る本来感尺度は確認されなかった。従って、誘発された気分条件間で本来感の差は、ほとんど見られないということが分かる。実験 1 と実験 2 で行った相関分析で確認された有意な相関は全て、ポジティブであるほど本来感が高く、ネガティブの時は本来感が低いことを支持する方向であった。しかし、有意であった相関は全てかなり弱いものであった。これらを総括すると、本研究において気分の差が本来感に一貫して強い影響を与えることを支持する結果は得られなかったと言える。しかし、本研究の結果が仮説を否定する方向に出たわけではなく、有意差の方向や相関係数の正負自体は仮説を支持する方向に表れていた為、今後実験方法の改変によっては、仮説を支持する結果になることもあり得る。

引用文献

- Erickson, R. J. (1995). The importance of authenticity for self and society. *Symbolic Interaction, 18*(2), 121-144.
- 石川 清子・菅原 嗣一・加部 千尋・根岸 良太 (2014). 日本語版本来性尺度の検討——パーソナリティ特性としての本来性の発達——日本心理学会第 78 回大会発表論文集
- Lenton, A. P., Slabu, L., Sedikides, C., & Power, K. (2013). I feel good, therefore I am real: Testing the causal influence of mood on state authenticity. *Cognition & Emotion, 27*(7), 1202-1224.
- 佐藤徳, & 安田朝子. (2001). 日本語版 PANAS の作成. *性格心理学研究, 9*(2), 138-139